

近畿地区(2府4県)における
室内楽演奏会の実施状況に関する調査報告書

公益財団法人日本室内楽振興財団

調査研究事業委員会委員長あいさつ

クラシック音楽の分野で室内楽はどちらかというと地味な印象を受けます。しかし、私たちはモーツァルト、ベートーヴェン、シューマン、ブラームス等の室内楽曲の中に最も重要な素晴らしい曲があることを知っています。また、多くのクラシック・ファンが歌劇、交響曲、協奏曲等を聴いて、最後にたどり着くのが室内楽だといわれてきました。

5年に亘る委員会で様々な問題提起をし、最初から手がけたのは室内楽演奏会がどの程度開催されているかという現状調査でした。その調査範囲をとりあえず近畿2府4県に限り、2005年（平成17年）から2009年（平成21年）までの5年間に開催された演奏会に限定して会場や曲目等を精査しました。

予想外の膨大な資料を整理するうえで、問題となったのは室内楽の定義です。当財団が実施している大阪国際室内楽コンクール&フェスタとの関連も考慮して、二重奏から八重奏を対象としました。また、コンサートには演奏曲目が室内楽のみではなく、他の編成の曲で構成されたものも多数ありましたが、それも調査対象に入れております。その上、調査した原資料も、もっと広範囲から得るべきかも分かりません。

統計上数字の羅列になりましたが、ここから近畿地区でのクラシック音楽活動の現状も見えます。それが世界の経済情勢と無縁でないことも明瞭ですが、更に次の5年間で予想することも可能です。

室内楽の原点は家庭内での演奏に始まります。親子、兄弟姉妹あるいは師弟といったごく内輪で演奏される音楽です。現在でも欧米では広く行われている少し高級な娯楽といえるものです。これらの家庭音楽はこの統計には含まれませんが、そのような身近な音楽の積み重ねが音楽文化を支える土台になります。まさに音楽振興の基礎は室内楽といっても過言ではありません。

その意味で、この資料はクラシック音楽の現状報告の一端に過ぎませんが、将来を考える一助になれば幸いです。

末筆ですが、有意義な議論を交わしていただいた委員の先生方、資料作成や整理をしていただいた事務局および関係各位に心からお礼を申し上げます。

2012年12月

梅本 俊和

目 次

1 はじめに	1
2 演奏会活動の概要	2
[資料1]	3
3 室内楽演奏会活動の編成別分類（二重奏～八重奏のクラシック音楽）	4
[資料2]	5
4 府県別、年別室内楽演奏会の開催状況	6
[資料3]	7
5 会館、ホールの使用状況	8
[資料4] 各年ごとの使用会館、ホール名一覧〈アルファベット順、50音順〉	9
[資料5] 各年ごとの府県別、会館、ホール別使用ランキング一覧	13
6 添付資料の注書き	17
〈近畿地区（2府4県）における室内楽活動調査2005年～2009年〉	

CD-ROM

添付資料〈近畿地区（2府4県）における室内楽活動調査2005年～2009年〉

目 次

1 室内楽活動調査2005年（平成17年）
2 室内楽活動調査2006年（平成18年）
3 室内楽活動調査2007年（平成19年）
4 室内楽活動調査2008年（平成20年）
5 室内楽活動調査2009年（平成21年）

1 はじめに

1992年（平成4年）5月に財団法人日本室内楽振興財団が設立され、我が国における室内楽の振興のために、多様な活動を続けてまいりました。そして、設立後20年を目前にした2011年（平成23年）11月には公益財団法人としての認定を受け、新たなスタートを切ることになりました。

この間、寄附行為の改定に加え、現在の定款を定めるに至りましたが、当初から当財団の事業の一環として「室内楽に関する調査研究」（定款4条1項4号）を規定しておりました。

2007年（平成19年）11月に調査研究事業委員会（以下、委員会という。）を組織し、調査研究活動の緒に就きました。そこで設定したテーマは、近畿地区（2府4県）における演奏会活動の実態、とりわけ室内楽の演奏会活動の状況を把握することでした。

テーマ設定後、基礎データの収集、整理、分類を手始めに年間5回ペースで委員会での検討を重ね、2011年（平成23年）6月28日の評議員会、理事会では2005年（平成17年）から2009年（平成21年）までの5年間の調査実績を中間報告いたしました。その後、データの一部修正・変更等の手を加えて今回改めて調査結果を公表することになりました。

今回の調査では、演奏会開催の会館、ホールの利用状況の調査に主眼を当てています。また、室内楽の編成については本調査では二重奏以上八重奏までをその範囲としております。

なお、二重奏については二人で演奏する音楽という本来の意味に立ち返り、ヴァイオリンリサイタル、チェロリサイタル、フルートリサイタル等も含めています。加えてピアノデュオ、アラカルト（独奏、混成、合唱、古楽、邦楽、ポピュラー音楽）も調査の対象としました。

この調査結果が関係各位、中でも会館、ホール関係者の耳目に触れて、次なるアクションへのステップボードとして利用いただき、些かでも室内楽の振興に寄与するデータとなれば当財団の望外の幸せとするところです。

なお、以下に使用している諸データについては月刊「音楽の友」（音楽之友社）別冊付録コンサートガイドを基礎資料とし、独自の分析を加えて構成したものです。

委員長	梅本 俊和（大阪音楽大学名誉教授）
委員	網干 毅（関西学院大学教授）
委員	黒川 浩明（大阪アーティスト協会会長）
委員	根岸 一美（同志社大学教授）

〈委員は50音順〉

2 演奏会活動の概要

この項では演奏会活動全体を対象とし、各形態別の開催頻度と経年の推移を掲載した。その際、各データの基準を示すための基点となる基準年を2005年とした（以下、同様）。

この基準年の2005年は阪神淡路大震災から満10年に当たる。この震災からの復興10年を経た年を起点とする本調査は、先の東日本大震災以降を見通す上で何がしかの参考になる面があるのではないかとの思いはある。

詳細は〔資料1〕のとおりであるが、概説を加える。

- (1) 演奏会活動全体（合計欄）の推移としては2005年以降2008年までは年々減少傾向をたどった。2009年になってようやく前年を上回る状態にはなったが、それでも基準年比で93%である。
- (2) 各形態ごとに2009年の実績を基準年(2005年)との比較で見れば、次のとおりとなる。

基準年比100%超	オーケストラ	<109%
	オペラ	<121%
基準年比100%未満	室内楽	<72%
	鍵盤	<84%
	弦管	<86%
	声楽	<96%
	合唱	<98%

- ・オペラは年ごとに増加し、2009年は基準年比121%となり、その件数も52件から63件になっている。増加要因としては2005年10月の兵庫県立芸術文化センター（西宮市）の開館による効果に起因するものがあると考えられる。
- ・鍵盤、弦管ともに80%台ではあるが、特に弦管は母数が少ないため、件数の増減を論ずるレベルではない。また、声楽と合唱は微減ではあるが、横這い状態である。
- ・室内楽の減少は特に大きく、2009年は基準年に対して72%まで落ち込み、その件数も398件から288件と大幅に減少している。
- ・一方、合計欄の演奏会活動全体をみても、基準年の1715件から1594件と大幅な減少となり、基準年比で93%となっているのは既述のとおりである。とりわけ2008年には1395件（基準年比81%）まで急激に落ち込んだが、翌年にはわずかに回復の兆しが見える。

これらの推移の要因としては2008年9月に発生したリーマンショックによる経済環境の激変を看過できない。

演奏会活動の概要 (形態別分類)

	2005年 (基準年)	2006年	2007年	2008年	2009年	備考
室内楽 (%)	398 (23.2) <100>	408 (24.6) <103>	348 (21.9) <87>	285 (20.4) <72>	288 (18.1) <72>	(%)は 全演奏会活動中 に占める室内楽の 割合
オーケストラ	455 <100>	433 <95>	440 <97>	374 <82>	494 <109>	
鍵盤	280 <100>	289 <103>	259 <93>	214 <76>	236 <84>	
弦管	49 <100>	22 <45>	24 <49>	31 <63>	42 <86>	
オペラ	52 <100>	61 <117>	61 <117>	67 <129>	63 <121>	
声楽	160 <100>	164 <103>	178 <111>	156 <98>	153 <96>	
合唱	115 <100>	97 <84>	89 <77>	85 <74>	113 <98>	
その他	206 <100>	184 <89>	193 <94>	183 <89>	205 <100>	ポップス、邦楽、 民族音楽など
合計	1715 <100>	1658 <97>	1592 <93>	1395 <81>	1594 <93>	

↓
(10月)兵庫県立芸術文化センター
〈阪神淡路大震災10周年〉

↓
(9月)リーマンショック

資料2

室内楽演奏会活動の編成別分類
(二重奏等～八重奏のクラシック音楽)

3 室内楽演奏会活動の編成別分類
(二重奏～八重奏のクラシック音楽)

先の記述は演奏会活動全体を俯瞰したデータであるが、以下については室内楽に焦点を当てて、分析を加えたものである。

[資料2] を仔細に見れば以下のような興味深いデータが見える。これを次の3つの区分により分析した。

- (区分1) 二重奏以上八重奏まで
- (区分2) 二重奏、ピアノデュオ、アラカルト
- (区分3) 三重奏以上八重奏まで

(区分1) 二重奏以上八重奏まで ([資料2] のA、B、C、D、E、F、G)

- ・二重奏以上八重奏までを室内楽とする考え方に基づいて経年変化をみれば、2005年以降では304件、349件、292件、238件、258件となり、やはり2008年が分岐点となっていることがわかる。
- ・2009年の基準年比については三重奏以上八重奏はほぼ横這い(103.3%)であるが、二重奏以上八重奏の括りてとらえれば、その基準年比は84.9%に下がる。

このことは室内楽に占める二重奏の割合が圧倒的に高いことを示している。

(区分2) 二重奏、ピアノデュオ、アラカルト ([資料2] のG、H、I)

- ・二重奏の編成が圧倒的に多いが、2008年、2009年ともに件数が大きく落ち込んでいるのは既述のリーマンショックによる経済環境の悪化などの要因が大きく作用しているものと思われる。
- ・ピアノデュオは件数が少なく、全体への影響はほとんどない。
- ・アラカルトは2005年をピークに大幅に減少している。特に2009年の減り方は顕著で、基準年の4分の1まで落ち込んでいる。

(区分3) 三重奏以上八重奏まで ([資料2] のA、B、C、D、E、F)

- ・2005年以降の経年変化を見れば、123件、170件、124件、112件、127件で、年ごとに件数の増減はあるが、5年スパンでは大きな変化は見られない(2009年の基準年比は既述のとおり103.3%)。
- ・三重奏と四重奏が最も多く、五重奏も多い。逆に言えば、六重奏以上は稀にしか演奏されていないといえる。

		2005年 (基準年)	2006年	2007年	2008年	2009年	2009年の 基準年比(%)
A	八重奏	5	5	4	3	2	
B	七重奏	0	0	1	0	3	
C	六重奏	4	5	3	2	4	
D	五重奏	30	48	16	30	39	
E	四重奏	37	58	51	39	39	
F	三重奏	47	54	49	38	40	
	計	123	170	124	112	127	103.3
G	二重奏	181	179	168	126	131	
	小計	304	349	292	238	258	84.9
H	ピアノデュオ	14	12	8	3	10	
I	アラカルト	80	47	48	44	20	
	小計	94	59	56	47	30	31.9
	合計	398	408	348	285	288	72.4

(10月)兵庫県立芸術文化センター
〈阪神淡路大震災10周年〉

(9月)リーマンショック

アラカルトには独奏、混成、合唱、古楽、邦楽、ポピュラー音楽を含む。

